

### 3. コロンビアにおける日本人移民の話—その3

天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

二つの移住地域、南部（カリ・パルミラ市）と北部（バランキージャ市）における日本人移民は、現在ではすでに3世代目、4世代目になっている。北部では5世代目、6世代目も誕生しているかもしれないだろう。

1994年、私は両地域の歴史だけでなく、その後の「日本人の意識と日本に対する感情」についても知りたいと思い、簡略な「世論調査」的な方法で約10人の日系移民の方にインタビューを行った。約25年前の資料であるが、その要旨が次のとおりである。（現在とあるのは1994年当時のこと）

＊「世代交代に見える両地域の日系人における日本と日本人意識調査」（以下、北部バランキージャ日系人はHB、南部カリ・パルミラ日系人はNBと表記）

ほとんどの初期のNBは農業に従事していた。事実、バージェデルカウカ県の農業界での大切な役割を担っていたわけである。1951年に結成されたS.A.J.A.（農業日本人会）も、その後、最盛期を迎え、耕地面積は8,600ヘクタールを超えるようになった。現在は減反しているが、作物の種類は増えている。例えば、豆大豆類、モロコシ属（コウリヤン、キビなど）、サトウキビなどが作付けされていたが、昨今では世代交代があり、後継者や次世代の職業の種類は千差万別である。

証言1（NB）「日本移住民の子供たちは土地の所有いかんによって労働に従事します。所有地が広ければ、子供間で分割でき、農業者としてそれぞれの家庭も養えるでしょうが、土地が狭いなら、次世代は農業以外の職業に従事しなければならないと思います。例えば、会計士、経理士などですが、今日びは良い仕事がそうみつかりません。」

バランキージャの北部移民でも同じような現象が起こっている。さらにコロンビアでは有名大学を卒業しても、良い職業につけるかわからないし、カリ・パルミラでは農業を続けない日系人も出てきている。バランキージャでは、コロンビア人と同様に良い職業には就職できないものである。世界中のどこにでもあることだろうが、コロンビア社会でも「コネと縁故」が良い仕事を手に入れるには必要である。これが現実であり、目に見えないヒエラルキーが存在する複合社会構造なのである。したがって、日本人移民は伝統的に社会的地位が無いため、コロンビアの伝統的な上流階級に社会文化的に適応するには、より年限がかかったのではないかと推察する。

＊日系社会と出稼ぎ

周知のとおり、1980年代のバブル景気という日本経済の好景気により中南米の日系社会からの出稼ぎが始まった。HBでもその例にもれなかった。

証言2（HB）「ここ、バランキージャでは日本人移民の子供の大半は日本に一時的に働きに行きたがったのです。結局私は30人以上も日本に送り出しました。そして1年2年の滞在の後、バランキージャに戻り、多くの人が新住居を構えたり自動車を購入したりしました。」

この証言2の回答者は、私が調査したところのバランキージャの日系人協会の道工<sup>どく</sup>さんである。このように二つの日系人協会は、夢を実現するために現在でも子孫を日本に派遣し続けて

いる。この現象は日本人移民を受け入れてきた、ブラジル、ペルー、パラグアイでも同様に起こっていた。

20世紀初め、当時日本では戦争が続き、また世界恐慌などで日本経済は悪化、弱体し、国が国民を養えない状態の時であった。国民は少しでも生活を向上させて故郷に錦を飾りたいという夢を抱いて、ラテンアメリカ諸国に移民した。今度はその逆で、子孫たちは利益のある仕事と富を求めて、親や祖父の国へと出稼ぎに旅立って行った。

証言3（NB）「ここに私たちが来た時は、日本文化や習慣はまったくなかったんです。移民の先人たちは、（それらを）維持することなど必要ない、それより早くにコロンビア社会に同化しなければいけない、と考えていました。だから、NBの家庭には茶碗や箸などの日本独自の食器もなければ、日本語も話しませんでした。彼らの子供たちが言語の問題を克服するために、早くスペイン語を習得するようにと願っていたのです。宗教にしても同様です。NBのほとんどの初期入植者は仏教や神道の信心を捨てて、カトリックの信者になったのです。それは子供たちの教育を考えてのことだったようです。なぜなら、洗礼を受けなければ学校へ入学できなかったからです。その後、日本が経済成長を果たし、大国の仲間入りをするようになってから文化や言語を伝承する大切さをようやく見出し、それはすべて祖国日本の状態に依るものだったのです。」

この方は第三次頃の移民だったと思われる。（残念なことに情報提供者の詳細は手元に残っていない。）

ここで特筆する

ことは、日本人意識が国の発展次第とすることである。事実証言者のほとんどが日本人を先祖に持つことを誇りに感じていた。

証言4（HB）「父親は日本文化や言葉を私に教えてくれなかったのですが、日本は良い習慣があります。子孫であることに満足ですし、日本の全てのことが好きです。というのも、子供にも日本の名前を付けるくらいですから。彼らももっと日本語や日本のことを学んで欲しいと思います。」

証言5（HB）「現在はテレビや雑誌で日本をよく聞きます。日本を誇りに感じています。ここの日系移民はとても団結していて良い人ばかりですが、祖母は決して祖父のことを私には話してくれませんでした。」

証言6（HB）「私は日本語を習っていますし、子供たちも勉強しています。もっと日本文化を知りたいです。従姉妹たちは現在日本に出稼ぎに行っていて、私もいつか行こうと思っています。」

証言7（NB）「私自身日本を賞賛しています。良い文化を持っていて誇りにも思います。日本人たちのもこの文化のお手本のように思います。」



孫たちのみこしと婦人会の炭坑節  
出典：『コロンビア移住史五十年の歩み』（コロンビア日系人協会移住50年史編集委員会、1981年）